

第二貝殻礁の造成、後に昭和50年代に行われた貝殻島代替昆布造成事業等の経緯を示す資料からは、恵まれた昆布漁場を失った戦後の北海道の苦悩が読みとられる。豊富な資料を駆使した労作である。巻末に昆布漁業史年表が31頁に亘って掲載される。私家版であり、希望者は下記に連絡のこと。

〒060 札幌市中央区北7条西11丁目 田澤伸雄。
なお著者は北大・理・植物学科出身の海藻学者である。
(千原光雄)

□ Farjon A. : **Pinaceae**. Drawings and descriptions of the genera *Abies*, *Cedrus*, *Pseudolarix*, *Keteleeria*, *Nothotsuga*, *Tsuga*, *Cataya*, *Pseudotsuga*, *Larix* and *Picea*. 330pp. 1990. Koeltz Scientific Books, Koenigstein. ¥34,800.

世界のマツ科のマツ属を除く総ての属と種類の総説であって、各属の相互関係、亜属、節の分類、各種類の検索と記述とがあり、各種類の全形図と球果や葉を付けた枝、葉が描かれ、種類ごとの分布図がつけられている。また、巻末に葉の横断面の図が付されている。

マツ科を Abietoideae, Laricoideae, Piceoideae, Pinoideae の4亜科に分類し、この中 Pinoideae は *Pinus* として単行本で1984年に出版されているので、今回の出版によってマツ科全体の纏めができたわけである。日本のマツ科も総て記録されている。今まで報告されたマツ科の総纏めで、ほぼ最終的な結論と言ってもよいほどに纏まった本である。注目されるのはモミ属の分類系で、この属は従来から色々な分類系が提唱されているが、日本の種類の類縁関係をたどると、殆ど納得のいかないものであった。新しいものでは Tang-shui Liu の *Abies* (1971) の大著があるが、その分類系には問題があるようにみうけられた。

今回 Farjon が提唱している分類系は、日本の

モミ属で見ると、ほぼ納得のいくものである。それによると、シラビソはトドマツと共にアジア大陸に類縁の種類がある。オオシラビソはシラビソとは異なり、北アメリカの *A. amabilis* Dougl ex Forbes が近縁であると言う。ウラジロモミは中国西部の *A. recurvata* Masters に類縁があると言う。シラビソはアジア大陸に類縁種があるが、1種類だけかけはなれて北アメリカ西部のアパラチア山脈に分布する *A. fraseri* (Pursh) Poir. も関係があるとするのは面白い。日本の森林を構成する主要な樹種の類縁関係が明らかにされることは、日本の植物相の解明には欠かせない。シラビソとオオシラビソのアメリカ大陸での類縁種との関係は、ホツツジとミヤマホツツジのアメリカ大陸での類縁種との関係(本誌 63:121, 1988)によく似ていて、同じような分化の歴史を持つことを想像させる。

なお、イラモミ(マツハダ)の学名は日本では *Picea bicolor* (Maxim.) Mayr の学名が親しまれているが、*P. alcoquiana* (Veitch ex Lindl.) Carrière が正しい学名であることは、H. E. Moore が1966年に主張したことで、それを繰り返して主張している。日本で *P. bicolor* が使われているのは、日本の裸子植物を纏めた Mayr (1890) が学名の選択を誤ったことに依る。*P. bicolor* の方が使い易い名であるが変更せざるをえない。白沢保美、H. Mayr、E. H. Wilson、草下正夫、林弥栄氏等の研究によって、日本の裸子植物はほぼ明らかになってきた。然しまだ幾つかの疑問は残されている。マツ科でもシコクシラベ *Abies veitchii* var. *sikokiana*、シラネマツハダ *Picea alcoquiana* var. *reflexa*、ヒメマツハダ *P. shirasawae* は分類が十分に確定しているとは言えない。これ等を明らかにするのは日本の研究者の責任である。

(山崎 敬)